

---

# AV女優

山本杏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

AV女優

### 【Nコード】

N4396I

### 【作者名】

山本杏

### 【あらすじ】

現役AV女優兼、同人作家の山本杏がAV女優の現代の形を描いた作品。AV女優になるまで、AV女優としての苦悩や。社会の貧困層における問題に着目しました。

## 第一話

雲ひとつない空。肌をひんやりとした空気が包む中。私はベンチに座り、湯気の立つ缶ジュースをすすり温まる。

突然、大きな影が現れ、見上げる。そこには短髪で小綺麗なスーツ姿の青年が優しく微笑んでいた。

私は長い髪が振り乱すのも構わず、青年に抱きついた。

「敬介……来てくれないと思ってた」

目頭が熱くなり、自然と涙が溢れる。

「これからは二人一緒だ。優子」

青年……敬介はそう言いながら、私を強く抱きしめた。

冷たい空気と敬介の肌の暖かさが、混じって私に伝わる。

自然に唇と唇が重なり合う。白い吐息。人気も構わず私達は熱いキスを交わした。急に気恥ずかしくなり、私が敬介から少し離れると。

敬介は私に向かって手を差し出した。

「家族になろうな」

敬介の言葉を聞いた瞬間。呼吸が止まりそうになる。

私はそっと、敬介の手に自分の小さな手を重ねた。

重なり合う体温。私と敬介は大きなボストンバックを抱え、手を繋いでゆっくり歩きました。

高校三年生の冬の事でした。

## 第二話

敬介の暖かい手を握りながら、私達は産まれ育った街を後にした。

電車にゆられ、疲れきっていたのか、敬介はすぐに眠りにつく。

私の肩に頭を乗せてきて、何だか敬介の髪の毛がくすぐったい。

小さな寝息を聞きながら、目の前を通り過ぎる思いでの街をぼんやりと眺めていた。

（敬介……ごめんね……）

声にならないくらい小さな声で呟いた。

人の少ない昼間の電車内では、ただ電車の滑走路を走る音だけが響き渡っていた。

私は瞼を閉じ、敬介の頭に頭を乗せる。

目に浮かぶのは、敬介の嬉しそうな笑顔。それと同時に沸いた私の中に蠢く憎悪を何度も思い出しては、グシャグシャにした。

駅に着くと、敬介がグシャグシャにした髪の毛を直してくれた。

私が笑うと、敬介も笑った。

### 第三話

電車の外に出ると、パラパラと粉雪が空から舞い降りてきた。私が掌を広げて上に向けると小さな雪が、次々と私の中へ浸透して行く。

「雪か……もう冬なんだな」

敬介の言葉に私は頷いた。

「真つ白……」

薄く積もった雪の上を敬介と二人、手を繋いで歩いた。

駅の改札を出ると、小さな商店街が見えた。昼間だと言うのに、どの店もシャッターを閉め、どこか寂しげな雰囲気漂わせていた。ふと、シヨールウィンドウの影に写る自分の姿を見て私は立ち止まった。

雪だらけで真つ白になったびしょ濡れのコート。

「どうしたの？」

敬介が急に立ち止まった私を、不思議そうに顔を覗かせてきた。

「なんでもないよ」

私は笑った。

真つ白な雪でびしょ濡れになったコートが、ウェディングドレスに見えたなんて。私はどうしようもなく阿呆なのだろう。

なんとなく神様に誓うみたいに、私は敬介の唇に軽くキスをした。

## 第四話

「敬介！」

突然、静かな商店街に男の、の太い声が響き渡った。

声の主を見るなり、軽く敬介はお辞儀をした。

「……………びっくりしたよ。急にお前が鳶職なんてやるって言い出したから」

声の主は驚いたように言うと、敬介は苦笑した。

「まあ……………」

「お前、海外進出だって、張り切ってたじゃねーか。あの会社はいいのかよ？敬介、お前は筋肉馬鹿の俺達と違って、ミソが詰まってる。お前なら、出来ると期待してたのに……………どうしたんだ？」

男が敬介に詰め寄る。敬介の後ろに佇む私の存在に気がつくくと、男はため息ついた。

「……………女か……………。仕方ねえな。部屋に案内してやるよ」 敬介は、男に綺麗にお辞儀をした。

「ありがとうございます」

男は一度、敬介を見てから、私に視線を合わせてきた。

「俺は錦にしき。お前なんていうんだ？」

「……………あ、あ…えっと、西村 優子です」

突然話しかけられて動揺しながらも、私はなんとか名前を言った。すると、男の大きな掌が私の頭を包んだ。反射的に身体を震わせるのと、掌は優しく私の頭を撫でた。

「敬介の事、頼むな」

私が頷くと、満足したように男は、歩き始めた。

## 第五話

錦と名乗る男の後を、ついて歩いて暫くたつと、家が立ち並ぶ住宅街に辿り着く。

錦はその中の小さなアパートの前で止まった。

「ここだ。まあ、ボロくはないだろう」

錦は笑った。

確かにボロくはなかった。私は安堵のため息をついた。

職場の寮と聞いていたので、もっと汚い長屋を想像していたから、思ったより綺麗で安心したからだ。

「じゃ、明日の朝6時に迎えに行くから、ゆっくり今の内に休んだときな」

錦は敬介に鍵を渡すと、そう言って帰って行った。

残された私達は、さっそくアパートの部屋の掃除を始めた。

アパートの部屋の中には、ちゃぶ台にテレビ、フライパンに鍋や食器や布団にストーブ、洗濯機、だいたい必要な物は置いてあった。

私達が掃除を終える頃には、すっかり夜になっていた。

「お腹空いたね」

私が布団の上に寝転ぶと、敬介も一緒になって寝転んできた。

「もう、この時間じゃスーパー空いてないよなあ……」

諦めたように敬介がいう。

「あれ？来る途中にコンビニあったよね」

敬介が突然、私に抱きついた。

「……そこまで歩きたくない」

掃除や引越し、転職、色んな事があったせいか、敬介はぐったりしていた。

私が心配そうに敬介を見つめると敬介は、無理をして笑ってみせる。

「大丈夫。優子は何も心配しないでもいいから」

そういつて敬介は、私の頭を撫でた。

## 第六話

明るい光が眩しいの気がつく、朝になっていた。

私はいつの間にか寝ていたのだ。

ふと、妙に広い布団を見渡すと、隣で寝ていた敬介の姿はなかった。

（錦さんと仕事に行ったんだ）

私は昨日の帰りがけの錦さんの言葉を思い出した。

ハンガー掛けられた、敬介のスーツ。

いつもなら、敬介は仕事に着ていくのに、スーツはハンガーに掛けられたままぶら下がっている。

今日から敬介はスーツを着ない職場。

今までと全く違う環境で、敬介は仕事なんて出来るのだろうか？  
考えれば考える程、私の頭の中はあつという間に不安で溢れかえっていた。

少しでも気を紛らわす為に、私はテレビのリモコンをつける。

ニュースキャスターがいつもと変わらない表情で、迎えてくれる。  
ほんの数日前までは、パパとママとみんなで観ていたニュース。

ほんの数日前なのに遠く感じて、何だか胸にポツカリと大きな穴が空いたようだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4396i/>

---

AV女優

2010年10月10日01時34分発行